
第八話

洛中変異事

『前太平記』上 卷第一 三十二頁から三十三頁より

承平四年五月二十七日、つむじ風が強く吹いて砂を空に巻き上げ、青空が急に暗くなり、昼夜はすぐさま時がたつ。近い距離の中（→目の前）も見えないので、道

咫尺の中も見えざれば、

行く人は道がわからなくなってしまった。これはどのようなことが起こっているの

行人道を失へり。

だろうか、不思議に思うときに、坤（南西）の方から、大地が激しく動いて、艮（北東）を目指して、次第に震えていく。はじめのころであるけれども、次第に強く震えだしたところに、都や巷の民家・神社仏閣に至るまで、壊れていないという所

洛中紫陌の民屋、神社仏閣に至るまで、 破損せずと云ふ所もなく、

もなく、水が沸いて天から溢れ（→大雨が降った？）、山は崩れて谷を埋める。

水は涌いて天に漲り、

山は崩れて谷を埋む。

巳の刻（午前十時ころ）から始まり、申の刻（午後四時ころ）が終わるまで、依然として止まない。ああ、今地軸も折れて、奈落の底に引き落とされるのかと泣き叫ぶ。

あはや、只今坤軸も折れて、奈落の底に引き墮とさるゝかと泣き叫ぶ。

ぶ。もしかしたら、逃げて助かる方角があるのだろうか、走り出したけれども、ただ（地響きに）酔ったかのように一步も進むことが出来なくて、そのまま倒れて

唯酔えるが如くにて、一足も引き得ずして、

転ぶ。もう日が暮れる時間になって、少し落ち着いたので、人々は奇跡的に命が助かった気持ちにして、大きく息をついて休んでいたところ、その夜の戌の刻ほどに

（午後八時ころ）、また良の方角から震えだして、昼の地震の百倍はした。天は墨を摩り下ろしているかのように（暗く）、長さは三十丈もあるだろうかと思える蛟のような化け物が二匹現れて、雲中に旗のように翻り、呼吸をするように炎を吐き

雲中に翻騰して、

出すと、天は輝き、地を照らし、闇夜はまるで白昼のようだ。（照らされて、）獣

闇夜かへつて白昼の如し。

の毛先すらも見えそうだ。この怪物は、しばらくして、雷のような音が鳴り響い

秋毫の末をも見つべし。

て、二匹は東西に飛び去ってしまった。その姿を見て、その音を聞いた者は、何も

其貌を見、 其音を聞きける者、

考えられなくなり肝を冷やさなかったということはない。日本という国が始まって

魂を消し胆を冷やさずと云ふ事なし。

以来、今もってこのようなことを記した文を見ることはない。仏の教え、国の掟は滅び果て、魔道の国となってしまうに違いない。その前触れであるだろうと、悲しまない人もいなかった。これは尋常でないと言って、陰陽頭^(老)賀茂保憲をお呼びして、どのような兆しであると判断申し上げるべしということを申し下す。保憲はかしこまって、「このような天変地異及び妖の類は、いつものことであると申し上げますけれども、今回の地震は占いに出了ところによりますと、まったく物忌み

甚だ御慎み

禱は、軽くはすみません。朝敵は四方の賊から起こり、年を積み重ねて、兵革が止

軽からず候。

むことはないでしょう」と、法令の文章を引用して、細かく記した文書をもって、奏上する。これによって、多くの社に命じて、色々な御祈禱が余念なく行われたのだった。

注釈

※壺・陰陽頭……「陰陽道」を司る陰陽寮の長官。「陰陽道」とは、陰陽五行の説に基づき、自然現象と社会現象との因果関係を解く。天文・暦数・方位などによって、占いや呪術を行なった。

陰陽頭賀茂保憲は安倍清明の師と言われ、天才的な陰陽道の達人と伝えられています。とくに歴法に関しての才能は秀でていて、彼の存在なくして暦法の発展はなかったといえます。

「秋毫の末をも見つべし。」の訳はうまく出来た気がするのでお気に入りです。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2015/5/23

改訂：2021/3
海熊童子

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※